

現代児童文学の行方

——いぬいとみこ『ながいながいペンギンの話』をめぐつて——

酒井晶代

〈一〉

『ながいながいペンギンの話』は、書き終えるまでに長い長い時間がかかり、また本らしい本になるまでに長い長い時間がかかった奇妙な本です。(中略)

幼い子どもは、注意力のつづかない——つまり長い話になど興味をもちつづけることのできない——幼稚な存在とみられて、原稿用紙二—三枚のたわいもない幼年童話の横行がゆるされ、いっぽう「文学的」「芸術的」という名のもとに大人の感傷に裏打ちされた悲哀のこい「幼年童話」が大人たちから高く評価されていたあの時期に、そうしたものを否定して、行動的な主人公が活躍する「たのしくて長い幼年童話」を書くことができるか否かということは、わたしには大きな問題でした。^(注1)

一九五七（昭和32）年三月、宝文館から出版されたいぬいとみこ『ながいながいペンギンの話』（以下、本稿では「ペンギンの話」とする）は、五〇年代半ばから活発化した童話伝統批判のうねりのなかで、現代児童文学の誕生を予告した先駆的な作品として高い評価を与えられてきた。^{注2}アデリーペンギンの双子、ルルとキキの冒険と成長をダイナミックに描いたこの作品は、作品それ自体はもちろんのこと、当時、若い世代を中心に創刊が続いた同人誌が初出発表の場となった点、西欧の児童文学作品や理論に影響を受けている点、保育や教育の現場と連携した読書実践を通して推敲が行われた点など、その成立過程をも含めて時代を象徴するものであったと言える。

岩波書店に勤務し、石井桃子らとともに「岩波少年文庫」や「岩波の子どもの本」の編集に携わりながら、「子どもと文学」^{注1}の出版など理論面においても時代思潮をリードしたいぬいは、六〇年前後に始まる「児童文学革新の時代」を考える際、看過することのできない作家の一人である。また、いぬい自身にとっても、単行本デビュー作である「ペンギンの話」には格別の思い入れがあるのだろう。以後、エディションが改められるたびに、「あとがき」等のなかで自作と時代との接点を探り、言葉にしている。冒頭の引用は一九六三（昭和38）年、理論社に版を移して再刊された折の「あとがき」であるが、出版までの長い経緯を振り返る語り口の背後に、「行動的な主人公が活躍する」たのしく長い幼年童話』を生み得たという確かな手ごたえを読みとることができる。

最初の宝文館版が絶版になった後、数年のブランクはあるものの、一九六三（昭和38）年には前述の通り理論社より名作プレゼント版が刊行され、以来「ペンギンの話」は現在まで読み継がれ、幼年文学の古典としてその地位を揺るぎないものとしてきた。なかでも理論社から刊行された名作の愛蔵版（六七年初版）と、続く岩波少年文庫版（七九年初版）の二つのエディションはロングセラーとして版を重ね、語句や漢字表記等に若干の異同はあるものの、ほぼ宝文館版を踏襲したこれらのテキストが長い間流布し、作品評価の根拠となってきた。ところが、九〇（平成2）

年、岩波少年文庫版第15刷に至ってテキストは大幅に改訂され、九三(同5)年と九五(同7)年にそれぞれ刊行された『四つのふたご物語』版とフォア文庫版にもこの新版が踏襲される。そして九九(同11)年一月には、最後まで旧版を採用してきた理論社の愛蔵版も「新・名作の愛蔵版」へのリニューアルを機に新版に転換、この十年間に旧版はほぼ一掃され、出版状況は大きな変容を遂げたことになる。^(註5)

先述のように『ペンギンの話』は、戦後児童文学史のなかで常に時代とともに語られ、位置付けられてきた作品であり、いぬいが「時代に書かされた作品^(註6)」とコメントするように、そうした役割を自ら引き受けてきた作品でもあった。本稿では作品が担ってきた時代性を意識しつつ、旧版の成立過程を確かめ、新旧両版を比較対照させる試みを通して、現代児童文学の象徴的作品としての位相の変化を検討してみたい。

〈三〉

『ペンギンの話』は、「第一のおはなし」「第二のおはなし」「第三のおはなし」という三つの部分から構成されており、個々の「おはなし」は物語としての独立性を維持しながら、全体でひとまとまりの長編として機能している。比較に先立って、旧版に沿いながら梗概を簡単に紹介しておきたい。

物語は冬の厳しい気候のなかで、卵を抱く父鳥の姿から書き起こされる。父親と母親が交代で卵を暖め、わが子の誕生を待ちわびるなか、春先に双子のペンギン、ルルとキキが誕生する。両親が餌を採りに出かけた折、外へ飛び出した怖いもの知らずのルルは、大カモメに追われたり、捕鯨船の人間に出会う。人間をペンギンの仲間と勘違いしたルルは、「セイさん」という船員に親しみを覚えるが、わが子連れ戻しにきた両親に連れられてペンギンの島に帰る

(第一のおはなし)。夏になり、氷の浮島に乗って沖に流されたルルとキキは、「ガイ」というシロナガスクジラの子とも友達になる。ガイの背中に乗って島へ戻る途中、持ち前の機転でシャチを退治したルルは、皇帝ペンギンの王様から閱兵式に招かれるが、弱い者を虐げる王様の独裁的な態度に反発した結果、幽閉されてしまう。番兵の老ペンギン「トト」に助けられて皇帝ペンギンの島を脱出したルルは、キキたちとともに、ガイの背に乗って帰還する(第二のおはなし)。冬が間近に迫り、ペンギンの子どもたちは集団で水もぐりの練習に励む。今さら水もぐりなんて、とルルが練習をしぶっていたある日、練習場をねらって大カモメが襲来。危険を知らせようとかけつけたルルの行動は裏目に出て、先生ペンギンが負傷してしまふ。冬を前に捕鯨船は南極を離れ、セイさんとルルは再会を期して別れることになる。厳しい冬がやってくるころ、先生ペンギンの怪我は全快する。ルルやキキたちは自分たちの成長を確かめ、春の到来とともに訪れるであろう「ながいながい冬があけて、おとなになれる日」の期待に胸をふくらませる(第三のおはなし)。

改訂は冒頭部と結末部に集中しており、それゆえに作品全体の性格を大きく左右するものとなっている。引用が長くなるが、次にそれぞれの冒頭部と結末部を書き出してみたい。(引用中の点線は冒頭と結末の区切りを示す)

〈旧版〉^(注7)

とおいとおい南極の島に、ペンギンのおとうさんがいました。

あたりは、みわたすかぎり、まっしろい、ゆきと、こおりのはらっぱです。

木もありません。草もはえていません。目もあけていられないほど、ひどいかぜが、いちにちじゅう、こなゆきを、ふきつけています。

おとうさんペンギンは、つめたいはらっぱに、じっと、うごかないで、立っていました。

「おとうさんペンギンは、足の上に、たまごをふたつ、だいていたのです。もしも、いま、おとうさんペンギンが、ここをうごいたら、ほかかとあつたまつている、ふたつのたまごは、すぐにつめたくなってしまうでしょう。そして、たまごのなかのあかちゃんも、つめたくなってしまうでしょう。」

びゅうびゅうと、うずをまいてふきつけてくる、こなゆきのなかに、おとうさんペンギンは、立っていました。いつまでも、うごかないで立っていました。

ルルとキキは、おもわず、かおを見あわせて、にっこりとわらいあいました。だれがもういちど、つまらない、ひよっこななかに、なりたいでしょ。

（この冬がおわつたら、ぼくたちは、ほんとうの、おとなのペンギンになれる！）

（ぼくたちが、おとなになったときには、どんなちいさなひよっこにだって、大ほうけんを、させてやるぞ！）

ひとしきり、ごうごうと、ふきつけてくる、まっ白いゆきあらしのなかに、ペンギンのこどもたちは、立っていました。ながいながい冬があけて、おとなになれる日のことをおもいながら、ペンギンのかたちをした、ゆきだるまのように、まっ白いはらっぱに、ならんで立っていました。

〈新版〉

（注）

とおいとおい南極の島に、ペンギンのおとうさんがいました。

夏のはじめ、ゆきとおりがとけて、小石をつんだペンギンたちのうちが、あちこちにかおをだしました。きょねんつくつた、ふるいうちです。うみべのかたいおとりもとけて、あおいうみが見えてきました。

ところが、ペンギンたちのあたらしいうちが、すつかりできあがつたいまになって、ゆきあらしがやってきたのです。びゅうびゅうとうずをまくかせが、こなゆきをふきつけて、あたりいちめん、まっ白い冬のけしきにわかりました。

おとうさんペンギンは、かおのまわりまでつもったゆきを、くちばしではらいのけながら、じっと、うちの上にはらばいになってしました。

つばきも、せなかも、こおりつきそうでした。でも、ゆきのなかの、おとうさんペンギンのおなかの下は、ほつかりとあたたかでした。おとうさんペンギンは、おなかの下に、たまごをふたつ、だいていたのです。もしも、いま、おとうさんペンギンが、ここをうごいたら、ほかほかとあつたまっている、ふたつのたまごは、すぐにつめたくなってしまふでしょう。そして、たまごのなかのあかちゃんも、つめたくなってしまうでしょう。

びゅうびゅうと、うずをまいてふきつけてくる、こなゆきのなかで、おとうさんペンギンは、じっと、はらばいになっていました。おなかの下のほつかりとしたふたつのたまごが、(しつかりして。)と、おとうさんペンギンを、はげましてくれました。

ルルとキキは、おもわず、かおを見あわせて、にっこりとわらいあいました。だれがもういちど、つまらない、ひよっこなんかになりたいでしょう。

(この冬がおわったら、ぼくたちは、ほんとうの、おとなのペンギンになれる！)

(ぼくたちが、おとなになったときには、どんなちいさなひよっこにだって、大ぼうけんを、させてやるぞ！)

(中略)

ゆきあらしが、ひとしきりごうごうとふきつけてきました。うみのこおりがぶつかりあつて、がたがたつきしつと、おとをたて、こなゆきがまっ白いうずをまいています。

「さ、出発だ！」

「こおりのかげで、ヒョウアザラシがねらっている。きをつけて、さあ、いこう！」

ふたりのせんせいは、そうきけふと、うみにとびこんで、およきはじめました。

「さ、ぼくたちも出発だ。キキ、おいで、ぼくもいくよ。」

ルルが、こおりの下へもぐつてから、うみの上にかおをだしてみると、大なみにのせられて、ずつとおきのほうからかおをだしたキキが、

いました。

「おにいちやん、ぼく、ここですよ。」

「おーい、ココ、がんばって！」

ルルは、ふりかえって、ココをよびました。

「おーい、リリ、はやくおいでよう。」

こんどは、キキがリリをよびました。

島のうみべにいたペンギンの子たちは、ルルやキキ、ココやリリたちにおくれまいと、つぎつぎ、うみにとびこみます。

こうしてルルとキキたちは、うみのむこうのこおりの大ぶねぎして、うまれてはじめての大ぼうけんに出発したのです。

一読してまず気付くのは、親ペンギンの抱卵の姿勢が「立って暖める」から「腹ばいになって暖める」に変化していることであろう。抱卵の季節も「まつしろい、ゆきと、こおりのはらっぱ」が広がる冬から、突然の「ゆきあらし」に見舞われるものの、おだやかな初夏に改められている。アテリーペンギンの繁殖期は夏季の約四か月であり、この間に巣づくりから産卵、腹ばいの姿勢による抱卵、育雛、巣立ちまでを行うとされる。^(注9) 生態をより正確に反映した改訂と言えるが、旧版では冬から翌冬へ、一年間という時間のなかに配列されていた三つの事件が、新版では夏の四か月の間の出来事として位置付け直されることになった。

この時間差によって、旧版において前面に打ち出されていた成長という主題が、新版では後退しているように思われる。旧版では一年間という物語内時間のなかで、読者は「おはなし」と「おはなし」の間に横たわる、空白の時間や事件をも十分に読むことができたし、それゆえに、三編の「おはなし」は有機的に積み重なり、繋ぎ合わされて、ひとまとまりの成長物語として機能することができた。^(注10)ところが、新版では四か月という凝縮された時間のなかに三

編が詰め込まれることによって、個々の「おはなし」間の発展的な連なりが希薄になり、旧版での事件の「積み重ね」は、単純な「繰り返し」へと変質している。

さらに冒頭と結末との関係に着眼すれば、立って卵を暖める父鳥を描いた旧版の冒頭部は、「ごうごうと、ふきつけてくる、まっ白いゆきあらし」のなかに並び立つペンギンの子どもたちの姿を提示した結末部と呼応しており、類似した場面が最初と最後に配置されることによって、時の経過や生命の循環、子どもたちの成長といった要素が前景化されていた。また一方で、類似した二つの場面の差異は、親と子、大人と子ども、個と集団といった物語全体を動かしていく様々な関係の隠喩ともなっていた。一方、新版の結末部には、吹雪のなかに直立するペンギンたちにかわつて、冬の訪れを前に海へと旅立つペンギンたちの様子が描かれる。繰り返しされる「出発」の言葉にも明らかのように、ここで強調されるのは、自らの成長の確認よりも、むしろ旅立ちの時を迎えた子どもたちの生き生きとした心情と行動である。冒頭部の抱卵⇨静のイメージとの対比が際立つ印象的な場面と言えるが、これから始まる旅を「うまれてはじめての大ぼうけん」とすることによって、作中の、即ち三編の「おはなし」の中で繰り返し広げられた冒険の意味もまた変質していく。成長を促すものとして冒険をとらえ、結末でその意義を確かめた旧版に対して、さらに魅力的な「大ぼうけん」へと向かう新版の結末は、成長といった意味づけ・価値づけを回避し、冒険それ自体の持つ面白さを強調していると言えるだろう。

もうひとつ、新版では「ふたつのたまごが、(しっかりと)と、おとうさんペンギンを、はげましてくれました」とあるように、父親と卵(これから誕生してくる子どもたち)とのコミュニケーションが強調されている点も見逃せない。旧版の卵は孵化の瞬間まで物言わぬ存在であり、引用部分では、身体を張って卵を守る親の様子のみがクローズアップされていた。ところが新版では、卵は父親を「はげましてくれ」る存在として直接登場しており、親と子、

大人と子どもの関係が大きく変容している。

旧版での大人たちは、子どもの行動を常に見守り、必要に応じて援助の手を差し伸べるキャラクターとして登場していた。先述のように、三編の「おはなし」を通して、家を飛び出したルルとキキは様々な冒険をする。彼らは、カモメやシャチに狙われたり、捕鯨船に連れて行かれたりといったアクシデントに見舞われるが、最後には両親や先生たちに助けられて、事無きを得る。子どもと大人の間には一定の距離が保たれており、子どもたちの冒険もまた、あくまでもその範囲内で繰り広げられるものであった。新版では親と子の親密さが強調される一方で、冒険を保証していた子ども—大人間の距離や関係が曖昧になっている。「成長」や「冒険」といった主題が高く評価されてきた「ペンギンの話」であるが、新版は、少なくとも旧版と同質の「成長」「冒険」の概念では読み解くことのできない物語に変わ^(注1)りていると言えよう。

△△△

『ペンギンの話』の初出は同人誌『麦』であり、以後、同人誌『こどもの本棚』や機関誌『子どものしあわせ』への転載を経て、単行本（宝文館版＝旧版）の刊行に至る。この間、保育所や小学校での子ども読者の反応を参考にしながら推敲が重ねられ、転載のたびにテキストは大きく変化している。ここではこれら雑誌掲載時のテキストに遡って、旧版成立までの過程を確かめておきたい。以下、△△△の冒頭部に該当する箇所を発表順に列挙する。

〈『麦』第五号、一九五四年 一一月〉^(注12)

ゆきと氷につつまれた、ある島に、ペンギンのおかあさんがいました。おかあさんは、たまごを二つ、あたためていました。

ある日、おそろしいふぶきがきて、目もあけていられないほど、ひどいかぜが、びゅうびゅうと、こなゆきを、ふきつけてきました。

おかあさんは、ゆきの中に、じつと立^つっていました。

あしの下では、二つのタマゴが、ほかほかと、あたたまっていました。おかあさんペンギンが、もしも、ここからにげだしたら、タマゴは、つめたくなつてしま^うでし^よう。

おかあさんは、じつと、立^つっていました。

〈『こどもの本棚』第一号、一九五五年 六月〉^(注13)

ゆきにつつまれたある島に、ペンギン鳥のおかあさんがいました。おかあさんは、たまごをふたつ、あたためていました。

ある日、おそろしいふぶきになりました。目もあけていられないほど、ひどい風が、びゅうびゅうと、こなゆきをふきつけてきます。おかあさんペンギンのくろい羽は、みるまに、まっしろくなりました。

はりのように、ふきつけてくるこなゆきのなかに、おかあさんはじつと、立^つっていました。

あしのしたには、ふたつのたまごが、ほかほかとあたたまっています。もしもいまおかあさんペンギンが、ここをにげだしたら、たまごはつめたくなつてしま^うでし^よう。そして、たまごのなかのあかちゃんも、つめたくなつてしま^うでし^よう。

おかあさんは、じつと立^つっていました。

〈『子どものしあわせ』一九五六年 一〇月号〉^(注14)

とおいとおい南極の島に、ペンギン鳥のおとうさんがいました。

あたりは、みわたすかぎり、まつしろい、ゆきとこおりのはらっぱです。木もありません。草もはえていません。目もあけていられないほど、ひどいかげが、いちにちじゅう、こなゆきを、ふきつけてきます。

おとうさんペンギンは、そのはらっぱに、じっと、うごかないで、立っていました。

おとうさんペンギンは足のしたに、たまごをふたつ、だいていたのです。もしも、いま、おとうさんペンギンが、ここをうごいたら、ほかほかとあつたまっているふたつのたまごは、すぐにつめたくなってしまふでしょう。そして、たまごのなかのあかちゃんも、つめたくなってしまふでしょう。

びゅうびゅうと、うずをまいてふきつけてくる、こなゆきのなかに、おとうさんペンギンは、立っていました。いつまでも、うごかないで、立っていました。

推敲を繰り返すなかで、舞台である極地のイメージが次第に形象化されていく様子を見てとることができよう。『麦』『こどもの本棚』両版では、「ある島」「ある日」といった曖昧な表現が多用されており、場面の輪郭はまだ不明確である。「とおいとおい南極の島」と舞台が特定された『子どものしあわせ』版になると、「みわたすかぎり、まつしろい、ゆきとこおりのはらっぱ」「びゅうびゅうと、うずをまいてふきつけてくる、こなゆき」などの情景描写が加わり、卵を抱くペンギンを遠近双方の視点から交互に捉える映像的手法や、父鳥と卵の組み合わせという意外性ともあいまって、読み手を一息に作品世界のなかへひきこむ力を獲得している。その後、単行本化の段階で卵の位置が「足のした」から「足の上」に変更されるなど部分的な修正はあるが、冒頭部に限定して言えば、旧版のテキストはこの『子どものしあわせ』版の時点で成立を見たと考えてよい。

いぬいは同人誌時代を振り返り、「お手本がどこにもなくて、書きながら進んでいく」なかで、「幼い人と空想を共有してすすむパターン」を見出していったと述べている。^(注15)「日本の観測隊が南極へいくことなどかんがえてもみられない

かったころ、わたしは古い『ナショナル・ジオグラフィック・マガジン』にのったペンギンの写真を見て、ひどくこれらがすきになり、あれこれと空想をめぐらして、ルルとキキの物語を書きはじめました。^(注16)「空想の力によって、わたしは南極へいったことはありませんが、ルルとクジラのガイのほうけんや、氷のわれ目の中にいたおばあさんペンギンのすがたなど、いきいきと目にうかべることができました」^(注17)のように、自作を語る際、いぬいは「空想」という言葉を好んで用いるが、作品の舞台が輪郭を明瞭にしていく過程は、そのまま、読者と空想を共有できる場の発見過程であったと言えるだろう。

一方、初出から一貫して強調されてきたのが、厳しい環境のなかで卵を守る親ペンギンの姿であった。『麦』版では、まだ出来事を羅列した感が強い文章のなかで「おかあさんは……じっと立っていました」のリフレインが際立っている。『こどもの本棚』や『子どものしあわせ』版になると「はりのように、ふきつけてくるこなゆきのなかに」といった自然描写や「いつまでも」「うごかないで」という語が追加されて、襲いかかる吹雪に耐えながら「じっと立っている」ペンギンの姿は、抱卵という生態をこえて比喩的な意味さえ帯びはじめる。

比喩的という点に関して、前出の理論社名作プレゼント版の「あとがき」のなかで、いぬいは次のように記していた。

自分ではたんなる擬人化をさけて「リアルな基礎に立ち、しかもたのしい幼年童話を」めざす意気ごみだったわけですが、その後、南極観測の成果の一つとして、ペンギンの生態が明らかになってみると、たとえばわたしの話の書きだしのペンギンの父鳥が雪あらしのなかで卵をまもって立っているすがたなど、ほんらい、わたしの書こうとしたアデリー・ペンギンのそれよりも、皇帝ペンギンのやりかたに近い……というようなことが、わかってきたのです。

でも、そうした事実を知ったいまでも、作品に書きだしをあらためることはしませんでした。ちょうど一九五三—五四年ごろ、日本の不毛な幼年文学の世界にあたらしい生命をみつけたしたいと、必死になっていた自分たちのすがたと、雪あらしに耐えて氷の原つばに立っているペンギンのすがたが、何か切りはなせない感じがして、手を加える気もちになれないのです。^(注18)

「雪あらしに耐えて氷の原つばに立っているペンギンのすがた」は、新しい価値観や方法論を模索していた自身の心象風景と重ね合わされ、いぬいは作品の冒頭部に強い執着を抱き続けてきた。大藤幹夫は引用部分に言及しながら、「リアルな基礎」とは単に生物学的なりアリティを指すのではなく、「内なる『現実』に依るもの」であり、「自分の世界」に誠実であろうとする姿勢と、他者としての子ども読者に向き合おうとする姿勢とが幸福な一致をみたところに、『ペンギンの話』の方法論的な新しさがあつたことを指摘している。^(注19) 冒頭部ばかりではない。続く孵化の場面には、冷たい風が吹き荒れるなかで誕生したルルが「二本の足をふんばって、かぜのなかに、しゃんと立」ちあがる様子が描かれるし、「第二のおはなし」の最初の場面では、弟のキキに「大ぼうけん」への憧れを語るルルの心情が、「こおりの山の上に、しゃんと立って（中略）うみのむこうを、見つめました」のように、やはり直立する姿に託して表現されていた。皇帝ペンギンの島でルルが幽閉された時、いつもは弱虫なキキもまた「くちばしを、キツとかたくむすんで、けなげに立って」兄を待ち続ける。繰り返し変奏されるこの直立姿勢は、「日本の児童文学にしみついたおとなごみの感傷性」を排し、「主人公の成長」「個人と集団の問題」「友情」を行動を通して表現しようとする^(注20) いぬいの創作活動の原点でもあつた。

〈四〉

三十年前にくらべると、南極に住むペンギンたちの姿が驚くほど身近かな存在として、私たちの家のTVにも映し出されます。(中略)

でもいまの子どもたちは、かわいらしいキガシラペンギンとかマゼランペンギンが、絶滅の危機にさらされている姿を、茶の間においてまざまざと見せられてしまうのです。(中略)

私たち人間の自然破壊の影響が、各地でペンギンたちの生活をおびやかし始めていることを知り、ルルやキキたちの子孫であるアテリーペンギンの「おはなし」をもっと書きたい、と切に思いました。でも、新しい物語を生みだすためには、その母体となる『ながいながいペンギンの話』のルルやキキたちの姿を、本来のアテリーのものにもっと戻さなくてはなりません。「おはなし」なのだからと割りきろうとしても、「リアルな基礎に立ち……」という足場がぐらついては、新しいイメージが動き出してくれないのです。ともかく自分にわかった範囲だけでも直そうと、私は本に訂正を書きこみはじめました。^(註21)

一九九〇(平成2)年の新版刊行に際して、いぬいは右のように改訂の動機を記している。旧版成立当時の南極は人びとにとって未知なる場所であり、^(註22)それゆえに想像力を自在に駆使し、理想や夢を語ることが可能な舞台となり得た。引用部分に続いて「私自身一九五〇年代にルルとキキの物語を書いたとき、遠い遠い世界の出来事として、ペンギンたちに夢を託すことができました」と回想される時、旧版から三十年を経過して、いぬいのなかでフィクション

構築の場が大きく揺らいでいる様子をうかがうことができる。ペンギン研究の進展や情報網の発達に取り込まれて、空想上のリアリティは行き場を見失ってしまう。「時代に書かされた作品」は、時代と作品との齟齬が拡大するなかで、ついに変容の時期を迎えたと言える。

一方、新版準備の時期にあたる一九八八（昭和63）年、いぬいは二十年以上続けてきたムーシカ文庫を閉じている。かつて「私にとって『子ども』とは、ここで出会った多様な性格の、生きている子どもたちのことだ」と語り、創作や実践の場として大切に育ててきた文庫の活動停止に関して、当時の対談では「子どもと共有できた時代が終わってしまった」「子どもたちと出会ううれしさのために、作品に活気が出た時代もありました。でも最近ほ作品を書いていても現実の生きた子どもを意識しすぎて失敗するのね」という苦渋に満ちた言葉を残している。いぬいはしかし、同じ対談のなかで「いまから作品をいくつか書いて、そのあとでもう一度子どもたちとつきあいたい。もういっぺんやりなおしたい」とも述べている。文庫の閉鎖は、旧来の価値観や方法論ではとらえきれない新しい子どもとの関係を模索する、新たな実践の始まりを意味していた。

一九六〇（昭和35）年前後に出発した戦後児童文学―現代児童文学の方法が、その行き詰まりや限界を指摘されるようになって久しい。現代児童文学の誕生を予告したとされる作品『ペンギンの話』は、九〇（平成2）年の新版登場と九九（同11）年現在、進行しつつある（出版上の）旧版消滅とによって、今度はその終焉を告げる象徴的な作品になるのかも知れない。五〇年代から六〇年代のいわば「戦後的」なりアリティを強く反映していた旧版に、九〇年代の新たなリアリティを付加しようとした改訂の試みは、二つの価値観の齟齬を際立たせることになった。真の意味での新版は、引用中でいぬい自身が語っているように「ルルやキキたちの子孫であるアテリーペンギンの『おはなし』」が書き上げられた時に完結するのであろう。改訂の試みは、「新たな物語」を創造しようとするいぬいの第一歩であっ

た。今、私たちに求められているのは、『ペンギンの話』を戦後児童文学の文脈から解き放つような新しい視座の獲得なのであろう。そして、『過渡的な新版』である改訂版には、その有益なヒントが隠されているように思う。

(注1) 理論社名作プレセント版「あとがき」(一九六三年一月)、一五二―一五三頁

(注2) 「ながいながいペンギンの話」については、「児童文学界の沈滞を打ち破るという歴史的役割を果たした作品の一つ」(長谷川潮)「ながいながいペンギンの話」論『日本児童文学』第一八巻第六号、一九七二年五月、四五頁)や、「ひとりいぬいとみこの記念碑的作品であるばかりでなく、日本の児童文学史上からみても、まさに記念碑的作品というべきものである」(西田良子)「ながいながいペンギンの話」『日本児童文学』一〇〇選(日本児童文学別冊)偕成社、一九七九年一月、六一頁)等の評価が定着している。

(注3) 石井桃子、いぬいとみこ、鈴木晋一、瀬田貞二、松居直、渡辺茂男の共著として、一九六〇年に中央公論社より刊行された。

(注4) 宮川健郎「現代児童文学の語るもの」(日本放送出版協会、一九九六年九月)、六一頁

(注5) 単行本の初版刊行年月と出版社を順にあげると次のようになる(○は旧版、●は新版の意)。なお、版元に問合せたところ、九九年末現在、理論社「名作の愛蔵版」(旧版)は、「新・名作の愛蔵版」(新版)と並行して刊行中。但し、将来的には新版への一本化を予定しているとのことであった。

○一九五七年 三月 宝文館版

○一九六三年 一月 理論社名作プレセント版(六八年一月、16刷最終版)

○一九六七年 一月 理論社名作の愛蔵版(九九年六月現在、165刷刊行中)

○一九七九年 七月 岩波少年文庫版

●一九九〇年 七月 岩波少年文庫改版(第15刷)

●一九九三年 四月 「四つのおたご物語」版(「ながいながいペンギンの話」ほか、ふたご四部作を集成したアンソロジー)

●一九九五年 一月 フォア文庫版

●一九九九年 一月 理論社新・名作の愛蔵版

(注6) 神宮輝夫「現代児童文学作家対談第六巻(いぬいとみこ・神沢利子・松谷みよ子)」(偕成社、一九九〇年一月)、三六頁

- (注7) 以下本稿では、旧版として岩波少年文庫（一九七九年七月初版、八七年九月第11刷）を使用する。
- (注8) 以下本稿では、新版として岩波少年文庫（一九九〇年七月第15刷改版、九八年四月第27刷）を使用する。
- (注9) 青柳昌宏「ペンギンたちの不思議な生活」（講談社ブルーバックス、一九九七年五月）
- (注10) いぬい自身、のちに同人誌「麦」連載時代を振り返って次のように述べている。（神宮輝夫「現代児童文学作家対談第六巻」前掲書、三〇頁）
- 『ながいながいペンギンの話』を書くのに三年かかっているんです。「第一のおはなし」「第二のおはなし」「第三のおはなし」と、それぞれ一年かかった。（中略）主人公の成長といっしょに内容も複雑になって、三年目に本になってから読んでみると、（二）より（三）の方が読者のグレードが高くなっている。そして、いぬいとみこも変わっているんです。
- (注11) 本稿ではふれる余裕がなかったが、改版にもなう広告や挿絵の変化も興味ぶかい。広告では「ペンギンの兄弟ルルとキキの成長を描く物語」（理論社名作の愛蔵版Ⅱ旧版、一九八二年二月第89刷）から、「（前略）南極に生まれたペンギンのふたごを、ハラハラドキドキするぼうけんが、まちうけています」（理論社新・名作の愛蔵版Ⅱ新版、一九九九年一月初版）へ、旧版で強調されていた「成長物語」の性格が、新版では消去された例がある。また、岩波少年文庫の挿絵は新版、旧版ともに大友康夫が担当しているが、新版の方が総じて幼さや可愛らしさを感じさせるものになっている。
- (注12) 一九五三年二月創刊の同人誌。「ながいながいペンギンの話」は、第五号（五四年一月発行）から七号（五六年二月）に連載され、完結している。
- (注13) 一九五五年六月創刊の同人誌。「ながいながいペンギンの話」は、第一号から三号（五六年一〇月）まで連載されたが、同誌の終刊により、「第一のおはなし」の途中で中断している。
- (注14) 子どもを守る会機関誌。福音館書店発行。「第一のおはなし」のみを、一九五六年一〇月号から翌五七年一月号まで連載。
- (注15) 神宮輝夫「現代児童文学作家対談第六巻」（前掲書）、三〇―三七頁
- (注16) 理論社名作プレゼント版「あとがき」（前掲書）、一五二頁
- (注17) 理論社名作の愛蔵版「作者のことば」（一九六七年一月）、一八三―一八四頁
- (注18) 理論社名作プレゼント版「あとがき」（前掲書）、一五一―一五二頁
- (注19) 大藤幹夫「幼年童話論・浜田広介といぬいとみこ」（『児童文学評論』第八号、一九七四年五月）、一三―一四頁
- (注20) いぬいとみこ「なぜ動物を主人公にした作品をかくか」（『日本児童文学』第一五巻第二号、一九六九年二月）、五二頁

(注21) 岩波少年文庫改版「おわりにもうひとこと」(一九九〇年七月)、一八六―一八八頁

(注22) 家庭総合研究会編「昭和・平成家庭史年表」(河出書房新社、一九九七年二月)によれば、一九五五(昭和30)年に日本学術会議が南極探險参加を決定、翌五六(同31)年秋には第一次南極観測隊が観測船「宗谷」で東京港を出港しており、旧版成立とはほぼ同じころ、南極観測が開始されたことがわかる。

(注23) いぬいとみこ「外なる子ども 内なる子ども」(佐藤泰正編「文学における子ども」笠間書院、一九八六年二月)、一〇九頁

(注24) 神宮輝夫「現代児童文学作家対談第六卷」(前掲書)、五七―五八頁